

## 東西の御番所

玉陵にはもともと、陵墓の中央門の東と西に位置する一対の御番所がありました。御番所は、琉球の家屋の主要な特徴を例示しています。赤瓦の屋根、木の戸を閉めれば完全に雨風を避けられる家を囲むベランダ（縁側）、畳の部屋の並び、台所をはじめとする生活に必要な機能を持つ空間など、その特徴の一部は日本本土から伝わりました。御番所は、床下に涼しい空気を循環させるために、巧みに築かれた琉球石灰岩の基礎の上に建てられています。

史料によると、御番所は 1748 年に建てられ、二人の男性が番人として任命されました。番人は名家から選ばれ、敷地の監督者として務めました。番人の一人は、第二次世界大戦が始まるまで西御番所に住んでいました。記録によると、御番所は、1901 年に琉球王国の最後の王である尚泰の葬儀が行われた際、僧侶や近親者の控え室として使われました。

現在の東の御番所は、2003 年に正確に復元されたものです。元の居住者が作成した建物の見取り図、および写真と遺構に基づいて建てられました。2000 年から 2001 年にかけて行われた調査では、西御番所の基礎部分の痕跡は見つかりませんでした。